

〈総説〉

母親と子どもの情緒応答的な関わりについての文献レビュー

Review of the Literature on Emotionally Responsive Relationships
between Mother and Child

小島 賢子¹

要旨

母親と子どもの情緒応答的な関わりについて文献検索を行い、母親と子どもの情緒応答的な関わりについて明らかにした。その結果、情緒応答性の発達には、情緒の読み取りと母親の応答という積み重ねのなかで、母親の試行錯誤の経験が重要となる。応答的な母子相互作用とは、子どもの働きかけに対して、絶え間ない、子どもの自立性と主体性を育むための母親の情緒的な応答のことであるといえる。一方、母親の状況や子どもの状態、育児ストレス、母親の愛着タイプに情緒応答性は影響され、ストレスによって適切な応答ができない子育てとなる可能性もある。また、母親の情緒応答性は、適切に行われることで、母親自身の自信となり、より乳幼児への応答的な関わりを引き出すことができる。

このように、母親の子どもの内的状態を敏感に読み取り、それに基づいて応答する適切な情緒的応答性が乳幼児期の子どもの発達に影響をもたらすことが明らかになった。発達に影響を与える応答的な母子相互作用に、子どもが保護者に働きかけてくるときの保護者の子どもへのより安定した心身のふるまいが必要と明確になった。

Abstract

A literature search was conducted to clarify emotionally responsive relationships between mothers and children. The search revealed that the mothers' accumulated experiences of trial and error in reading and responding to their children's emotions are important for the development of emotional responsiveness. Responsive mother-child interactions involve continuous emotional responses by the mother intended to foster the child's autonomy and identity in response to the child's approach. However, each mother's emotional responsiveness is influenced by the mother's situation, the child's state, parenting stress, and the mother's form of attachment. Stress may also cause the mother to become incapable of responding appropriately in parenting. Furthermore, when the emotional responsiveness of the mother is appropriate, this can give the mother confidence and elicit more responsive interactions between the mother and her infant.

These findings revealed that sensitive reading by mothers of their child's internal state and appropriate emotional responsiveness based on this reading has an effect on the child's development during infancy. Stable physical and mental behavior on the part of the parent (the mother) toward the child, whenever the child approaches the mother, is required to establish responsive mother-child relationships that positively influence development.

キーワード：情緒応答性, 応答性, 母子相互作用

Emotional responsiveness, Responsive, Mother-child relationships

I はじめに

Bowlbyは「両親（または両親に代わる養育者）が子どもをいかに扱うかということに深く影響される」と指摘し、「感受性に欠け、応答的でなく、放置しがちな、あるいは否定的な親を持つ子どもたちは、ある程度精神的に不健康で、もしも非常に不運な出来事に遭遇すると、挫折しやすくなる

ような、逸脱した経路に沿って発達する傾向にある」（Bowlby, 1993）と述べている。また、乳児期の子どもと養育者の関わりについて、脳科学の見地からは、乳児期の子どもの基本的な機能（感情の調整）の獲得に重要であるとわかってきた（乾,2014）。その関わり方について、言語を持たない乳児の情緒の表出を読み取り、適切に応答する能力、すなわち、「情緒応答性」の重要性（神谷,2013）

1 Satoko KOJIMA 千里金蘭大学 看護学部

受理日：2019年9月6日

が明らかになっている。

しかし、現在の母親は、核家族化により子育てに関わる親の子どもとの関係性を構築する知識や技術が伝えられていないと指摘されている。ベネッセ教育研究所『第2回妊娠出産子育て基本調査報告書』(2011)では、はじめて0～2歳児を持つ母親が、年齢に応じた子どもへの関わり方に悩むという結果であった。このような母親は、子どもとの生活の中で育児ストレスを引き起こす。育児ストレスが高いと母親の情緒応答性が適切に機能せず、そのことによって、育児ストレスが高まるといった悪循環に陥る(神谷,2013)といわれている。一方、ストレス反応と子どもへの関わりは、強い関連性を持つ。子どもへの関心の持ち方(肯定的か否定的か)が媒介となり関わり方に影響を与える(池田,2011)という結果がある。

次に、応答的な母子相互作用について、Mahler(1975)は「子どもの自律的自我が最高に機能する上で欠くことのできないものは、母親の絶え間ない情緒的有効性である」と述べている。母子間の応答的なかかわりを通して、乳児は自分を利用することができ、自分に対して応答してくれる人として母親について実際的なモデルを作り上げる(依田,1981)のである。そのうえで、子どもは自分の反応に返してくれる親を信頼するようになる。

『保育所保育指針(平成29年3月31日厚生労働省告示第百十七号)』は、「身近な人と気持ちがつうじ合う」という内容のなかで「温かく、受容的な関わりを通じて自分を肯定する気持ちが芽生える」としている。また、心地よい身体接触を含む安全のサイクルを繰り返し経験することで、子どもの心身が健全に発達していくといわれている(飯塚,2010)ことを考え合わせると、心地よい身体接触を含む情緒的な応答は、母子相互作用を促し、子どもの発達を促すといえるのである。

依田(1981)は、乳児の「泣き」に対して効果的で最も頻繁に行われた反応は、抱き上げることであったという実験に対して、身体接触による母子相互作用は、特に生後数か月においては少なくとも対面的相互作用と同様に重要であると判断している。また、身体接触を頻繁にするかではなく、どのように乳児と身体接触するのが重要であると述べている。このことについて、阿部(1995)は、5か月の乳児に名前を呼びながらあやすと喜ぶことから、「あやすーあやされる」ことを重ねて、子どもは「快い=人」の周辺を強化すると述べている。

また、「快い情感を共有する」ことで、満足のいく状態を作り上げてくれる人とそうでない人がいることが分かり、子どもはやがて、「特定の人」を分化させていく(阿部,1995)。この結果、特定の人と情緒的な結びつきをすることで子どもの情緒が安定し、また、この体験が人と親密な関係を築き社会的な絆を結ぶという発達を促すといわれている。また、母親の接触には、あまり活動的でない乳児を活発化させ、泣いている乳児にはむしろ鎮静化する効果を持つという研究結果がある。このように、身体接触を子どもに行っても、子どもに一律な反応はなく、その時々の子どもの状態によって刺激は乳児に対して持つ意味が変化する。乳児の状態の読み取りが重要となり、タイミングよく乳児の状態を調整することが必要とされる(山口,2003)。このことから、身体接触のタイミングをはかり、応答的なかかわりを行うことによって、子どもの発達に影響を与えることが考えられた。心地よい身体接触は、保護者のやさしい慈しみの気持ちでもある。その、気持ちを体験する機会が多いことは、子どもの心の発達に好ましい影響を与えられられる。また、「養育者の機敏さと欲求に応答する能力を含む情緒応答性は1歳の乳幼児に安定した愛着を引き出す」(Emde,2003)とある。以上から、応答的なかかわりと心地よい身体接触が、安定した愛着を引き出し、探索行動を活発化させる。また、応答的なかかわりを通して、乳幼児が、自分の対人関係の経験となることが明らかになった。人との社会的な絆を結ぶことで就学前の社会的な能力へつながることが考えられた。

しかし、子どもの育ちをめぐる現状を見ると、ベネッセ教育研究所の『幼児の生活報告書』(2016)では、2005年と比較して、母親の育児に対する否定的感情が専業主婦において高まる傾向が示されていた。しかも、否定的感情は、低年齢児で未就園児を持つ母親の方が強いという結果であった。このことから母親が育児に対する不安を抱き、育児ストレスから自信を喪失し、やがて子どもと共に社会から孤立する状況が多く発生している(榎,2010)ということである。さらに、池田ら(2011)による研究では、母親による子育ての状況に対して「ストレス反応」が有意な影響を持ち、因果関係に「子育て姿勢」が影響していることが明らかにされている。そこで、母親が行う子どもとの情緒的な応答に関連する文献を検討する。

I 目的

母親と子どもの情緒応答的なかかわりについて文献検索を行い、(1) 対象について乳幼児を持つ母親、(2) 母親の情緒応答性に関するもの、(3) 母親の育児ストレス及び育児困難感に関するもの、(4) 母子関係に関連したものを抽出し母親と子どもの情緒応答的なかかわりについて明らかにする。

II 方法

1. 研究方法

1) データの収集方法

文献検索は、国内発行の医学・看護学等及びその関連領域の雑誌論文を収録した医学文献データベース「医学中央雑誌」と、国立情報学研究所学協会で発行された学術雑誌と大学等で発行された研究紀要の両方を検索できる「CiNii (国立情報研究所論文情報ナビゲーター)」の検索媒体を使用した。文献は原著論文・研究報告を対象とした。対象期間は2000年～2015年の15年間とした。キーワードは「情緒応答性」「育児ストレス」「育児困難感」と「母子関係」「母親」をそれぞれにかけ合わせて検索した。医学中央雑誌で5件、CiNiiで38件の文献が抽出できた。本研究の目的にあった文献の選択は(1) 対象について乳幼児を持つ母親、(2) 母親の情緒応答性に関するもの、(3) 母親の育児ストレス及び育児困難感に関するもの、(4) 母子関係に関連したものとした。検索によって挙げられた題目、キーワード、要約を確認し、対象が父親を対象としている研究については、目的を考え除外した。

2. 対象の文献の概要

対象となる文献の概要を、表1「情緒応答性と関連する研究一覧」に示した。原著論文が4件、研究論文が5件、学術論文が3件、研究報告が1件であった。情緒応答性の特徴を捉えている文献は4件、情緒応答性と母親の育児に関連するものである文献は6件、母子相互作用の文献は3件であった。対象者数範囲は、8～120名であった。研究方法は、質問紙や測定用紙とビデオ観察を分析した文献は3件、日本版IFEELを用いた文献は8件、半構成化面接法による調査研究は1件であった。測定用紙及び質問紙、半構成化面接法、ビデオ撮影方法を用いた文献は1件であった。

3. 用語の定義

(1) 情緒応答性 (emotional availability) : アメリカの精神科医R.エムディ (Emde, 1935-) が定義した、乳幼児が非言語的コミュニケーションによって伝えてくる情緒的信号を的確に読み取って適切に応答する母親の心的態勢のこと。

(2) 「応答」とは、: 子どもが環境に積極的に働きかけ、それに対して環境から『反応』が返ってくることをいう (宮原ら、2004)。

(3) 「応答的な関わり」とは : 「一人一人の子どもの置かれている状態や発達過程などを的確に把握し子どもの欲求を適切に満たしながら、応答的触れ合いや言葉がけを行う (保育所保育指針) (平成29年3月31日厚生労働省告示第百十七号)

III 結果

子どもの情緒への有効な応答は、乳幼児期における養育者と乳幼児の感情的な交流における養育者側の必要な態度である。母親の態度には、小原 (2006) は研究レビューのなかで、母親の内面的、主観的变化にとどまらず、子どもとの相互作用においてその変化を捉えることが重要と述べている。また、母親は、子どもとの相互作用を通して、この能力を発達させているといわれている (小原, 2006)。以上の観点を含みながら、情緒応答性についてまとめる。

1. 情緒応答性

長屋 (2005) は、乳幼児表情写真 (IFEEL Pictures) を用いて、0～24か月児の母親を対象に、自身の子どもの性別、数、年齢が情緒読み取り傾向に与える影響について検討している。結果は、子どもの人数が異なると情緒読み取りが異なった。同様に子どもの性差の影響が認められている。子どもが複数いる母親の場合、より自分に合わせることを求めている。子どもの発達に伴う母親の認知変化による子どもへの影響と子どもの応答がさらに母親の認知に影響を与えるという相互作用が推測されている。母親は子どもの同胞間の関係にも影響を受けていることが推測されている。このことから、情緒応答性は母親自身の子どもの状況や子どもの発達に応じた内的状態の変化に影響を受けているという結論である。しかし、ケース数が少ないことで、子どもの性差による読み取りのちがいが十分に論じられていない。また、情緒

応答性は、母親の子どもとの相互作用によって発達すると考えると、差が生じる理由を明らかにする必要がある。

次に母親の特性として、林ら(2010)は世代間伝達があると指摘している。世代間伝達とは、林は「母親の幼少期における両親との間での経験が母子の相互作用に大きな影響を及ぼしその特徴、性質、価値観等が子どもから孫へと伝達する」としている。被養育経験は母親からの影響が大きい。その経験を中心に検討を行うため、ネガティブな被養育体験を持ちながら適切な養育行動を示す母親を対象にしている。被養育経験の伝達への母親の認識は、ネガティブな養育体験を持つ母親が被養育体験を伝達してしまうことを強く意識していた。それは、接し方でされて嫌なことをしないようにという認識であり、伝えないためには重要であると考えている。世代間伝達という特性について明らかにできたことで、母親の個別的な情緒応答性を捉えるための視点となった。しかし、対象の人数や対象者を選択する段階で、意図的な操作が入り、一般化できにくくなったと考える。

小原(2005)は母親の情動認知の発達的変化を検討した。生後4か月から12か月の縦断研究を行っている。その結果、子どもの月齢が高くなるほど、母親による不快な情動認知は増加し、読み取る情動の幅が広がることを示されている。これは、子どもとの相互作用による試行錯誤の経験が、不快な情動も含めた様々な情動認知を可能にしたのではないかと考えている。また、表情のみならず、さまざまな文脈情報を関連づけて情動を推測し解釈するという発達的変化を生じていると述べている。これは母親の試行錯誤の経験がいかに重要であるかを示唆している。この経験を重ねるための環境づくりが必要であると考えられる。この試行錯誤の経験は、情緒の読み取りと母親の応答という積み重ねである。この相互作用をどのように行ったのかという経験を示すことが必要となる。

そのことについて、岡藤(2009)は、母子関係の出発点である妊娠期の母親を対象として情緒の読み取りと応答反応の特徴を見出した。かかわりの特徴には「積極的な関わり」「消極的反応」「受容的反応」が見出された。快の写真には「快感情への働きかけ」、不快な写真には「思考・行動への働きかけ」、快・不快のあいまいな写真では「思考・行動への働きかけ」が最も多くなっている。なかに、消極的な反応をする母親もいたことから、周産期

に母親の情緒応答性の特徴を把握できれば、出産後の育児困難感、母子の関係性の問題を推測することができるという。この結果は、産後の早い時期に母子のかかわりについて推測できたうえで、支援することができることにつながる。ただ、妊娠期では望まない出産の場合は、配慮が必要であると考えられる。

2. 情緒応答性と母親の感情との関連

小原(2005)は、母親の抑うつと育児困難感の関連に情緒応答性がどのように関連するのかを明らかにした。母親の抑うつは育児困難感を高め、子どもの不安感情の読み取りを高める。不安感情の読み取りは育児困難感を弱めるという結果である。子どものネガティブな情緒を読み取る母親は子どもの不安感情を受け止め適切に応答する可能性の高い母親の可能性が高いと結論づけている。この点については小原も述べているが、推測の部分が多く、実証するべきであると考えられる。

小原(2005)はまた、母親の情動共感性及び情緒応答性と育児困難感とどのように関連するかを検討している。育児困難感への関連は、子どもの年齢により異なることが示されている。0歳児を持つ母親の育児困難感には母親の情動共感性が関連していた。また、1歳児を持つ母親は母親の情緒応答性が関連していた。母親の育児困難感には、母親として経験を重ねるにつれて、母親要因である情動共感性よりも母子相互作用が生じる情緒応答性が関連している可能性が考えられた。情動応答性は子どもの年齢に影響を受けることから、子どもの年齢のちがいによる差異が明確になった、0歳児の母親に比べ、1歳児の母親の方が「不安」の表情を有意に多く読み取っていたことから、育児経験のちがいが重要であることが示された。

岡藤(2009)は妊娠期の母親の過去の親との関係についての語りから、内省機能を査定し、それが子どもへの応答とどのように関係しているかを調査した。内省機能とは、自己と他者の行動を認知し理解する能力である。この機能は、情緒応答性の基礎となる。内省機能スケールを用いてインタビュー内容を質問項目ごとに査定している。その結果、妊婦の内省機能の高さによって、乳児の表情からの感情・情緒の読み取り、乳児への応答反応のちがいが見られることを明らかにしている。内省機能の高い人は、乳幼児の表情の読み取りや、それに対する応答反応において偏りや歪曲が見ら

れず、バリエーション豊かな反応ができるのではないかという結論に至っている。この結果は、人の語りからであるが、スケールを使い内省機能を査定しているため、出産後の情緒応答性を客観的に予測しようとしている。今後、実際の結果と比較することで最終的な結果となるため、縦断的研究が必要となる。

金城（2012）は育児を支える要因の一つとして育児自己効力感の概念をもとに研究を行った。その結果、母親が子どものさまざまな感情の機微に対して豊かな視点を持つことが、対応の難しいかかわりに対して効力感を上げる可能性が示唆された。乳幼児の「心」を豊かに帰属させて理解しようとする傾向（Mind-Mindedness）を持つという視点も含めて、今後検討する必要がある。

次に、神谷（2013）の研究では、育児ストレスの高い母親の情緒応答性にどのような特徴が見られるのか、また、どのような反応パターンが生じるのかを検討している。その結果、育児ストレスの高い群の母親は、乳幼児の否定的な感情を受容し、その感情、情緒に応じたかかわりが難しいことが示唆されている。また、乳幼児の情緒を読み取れなくても母親は母親なりに乳幼児に働きかけていることが明らかになった。このことから、母親の子どもへの働きも含めて母親の情緒応答性を検討する必要があると述べている。母親が子どもの感情の読み取りが分からないことや否定的感情を持つ場合にその理由を見極める必要があることが明確になった。

3. 母子相互作用と母親の状況との関連

岩田ら（2010）は、産後1週時では、子どもの気質を刺激に対して敏感であると認識している母親の抑うつが有意に高く、出産後間もない時期には母親の抑うつ傾向と子どもの易刺激性とが影響を及ぼし合う可能性があることが示唆されたことから、さらに、妊娠後期から産後3か月までの追跡調査を行っている。その結果は、3か月うつ傾向群は3か月非うつ傾向群と比較して情緒応答性が低く評価されている。ビデオ評定では情緒的に温かくポジティブなかかわりが低く、気分の状態が沈んでいて、緊張が強い様子が認められている。3か月うつ傾向群の乳児の反応は感情的にネガティブな傾向があり、気分の状態が沈んでいて、緊張が有意に高く、やりとりがスムーズでないことが明らかになっている。母親の情緒的応答性

の乏しさが子どもの情緒面や行動に影響を及ぼし、さらに子どもの反応の乏しさや難しさが母子のやりとりの不調和を強め、相互作用の悪循環を招いていることが示唆された。さらに、3か月の母子相互作用には子どもの要因が影響を与えていると示唆されている。その要因とは、刺激に対する感受性である。その乳児は、情緒的側面の感情表現の質が単調で、ネガティブであり、緊張が高く母へのかかわりが消極的となる。そのため、母親が子どもの信号を適切に読み取り対応することが困難となる。この子どもの気質という側面は、母親の心理・精神的要因が影響を与えるという可能性が示唆されている。そのため、母親の子どもの行動特徴への不満や育児への自信なさからくる母親の内面の情緒的葛藤や精神状態などを考慮する必要があることが明らかにされた。岩田らの研究が子どもの要因において易刺激性への実証ができたことの意義が大きい。母子相互作用においては、母親の情緒応答性が子どもの気質と反応に影響を与えていることを明らかにしている。また、母親の心理・精神的要因が母子相互作用に影響を与えていることが明確となり、育児支援の方法の方向性を提言している。

飯塚（2013）の研究は、低出生体重により、子どもとの母子分離を経験した母親を対象に、その心理、情緒的経験、葛藤を描いたものである。また、母親の体験が母子関係構築への危機的状態を発生させることを明らかにした質的研究である。母親は、早産になった自分を責める気持ちが強く、早産になった子どもへの申し訳なさを感じている。この自責の念は繰り返し語られ、癒えることなくあるごとに湧き上がってきている。このことを背景にしながら、母子関係を構築していたが、母親は子どもとの分離によって、心理的距離が発生し、母子関係の構築のための貴重な時期に危機的状態に陥ることが確認された。しかし、自由に抱っこすることができるようになると危機的状態は一気に緩和される。母親としての実感を抱くことができたためである。だが、自責の念は、長期にわたり湧き上がる感情であることが考えられている。結果は、抱っこや授乳といった身体接触をすることによって危機的状態から脱することの可能性を明らかにしている。

井上（2015）らは、初産母子を対象に、生後1週間以内と1か月における母親の子どもに対する愛着と母子関係の変化と関連及び影響因子につい

てMAI-J (愛着) 測定とAMIS (母子相互作用) 測定によって明らかにしている。その結果、愛着に変化がなく、母子相互作用は1か月後に上昇した。1か月後にはMAI-JとAMISには有意な相関が見られている。また、1か月時点でのMAI-JとAMIS (母親項目) 得点は、退院前に授乳やおむつ替えなどの育児技術に「自信ある群」が「自信ない群」より有意に高かった。愛着形成や母子相互作用を促進するためには、入院中に母親が育児に自信が持てる働きかけ、特に授乳に関する看護師の援助が必要であると結論づけている。

IV 考察

1. 情緒応答性

「応答的なかわり」は、乳幼児期の子どもの成長・発達にとって重要であるといわれている。子どもの成長・発達は、この遺伝的素質を持った子どもが環境との間で行う「相互作用」を通して発達することである。この環境とは、環境のうち人間の働きかけに対して反応する<ひと>環境のことを応答的環境と呼び、人間の働きかけに対して、直接的に反応しない物理的自然的<もの>環境から区別することである(宮原,2004)。この応答的環境のなかで、最も大切なものは、家族である。そのため、保護者(母親)に対しては、子どもの内的状態を敏感に読み取り、それに基づいて応答することが求められていた。子どもは、環境との間で行う「相互作用」を通して発達するといわれていることから、応答的な母子相互作用とは、子どもの働きかけに対して、絶え間ない、子どもの自立性と主体性を育むための母親の情緒的な応答のことであるといえる。

情緒応答性とは「乳幼児が非言語的コミュニケーションによって伝えてくる情緒的信号を的確に読み取って適切に応答する母親の心的態勢」(Emde,1983)と定義されている。乳児の反応を読み取り、適切な応答が認められたときの母親は、自分自身のことをより良く感じ、適応的な育児行動をするといわれている。しかし、母親の情緒応答性は、子どもの人数、性、年齢、子どもの同胞関係によって変化するものである。被養育経験の伝達への認識は、ネガティブな養育体験の母親が「伝達してしまうこと」を強く意識している。母親の情緒応答性の特性を知るには、どのような養育体験を持ち、世代間の伝達をその母親がどう意識

しているのかという視点が重要となる。情緒応答性の発達には、情緒の読み取りと母親の応答という積み重ねのなかで、母親の試行錯誤の経験が重要となる。また、周産期に母親の情緒応答性の特徴を把握することによって、出産後の育児困難感、母子の関係性の問題を推測することができるということが明らかになった。

2. 情緒応答性と母親の感情との関連

次に、応答的なかわりに必要な子どもの反応に基づいた、適切な情緒的な応答を明らかにする。乳児の反応を読み取り、適切な応答が認められた時の母親は、自分自身のことをより良く感じ、適応的な育児行動をするといわれている。この乳児の反応を読み取る能力は、育児経験によって差があり、乳児との相互交渉の経験から表情のみでなく、さまざまな文脈情報を関連づけて捉えることで母親自身が発達して獲得できるものである。

しかし、乳児健診で子どもにどのようにかわればよいか分からないと訴える母親も多い現状があり、母親のかわりは、子どもの状態が影響を及ぼしていた。また、母親の情緒応答性が適切に機能しない状況として、育児ストレスが高く、うつ傾向であることが挙げられる。そして、子どもの気質を捉える母親の認識も子どものかわり方に影響することが明らかになった。一方、子どもへの関心の持ち方(肯定的か否定的か)が子どものかわり方に影響を与えていた。また、Meinsら(1997)は、乳幼児の段階から子どもは、心を持った存在<Mind-Mindedness>と見なしている養育者は、子どもとの相互関係において、心に関するやりとりを多く行っていることが想定されると述べている。さらに、愛着安定型の子どもの養育者が高く<Mind-Mindedness>を有しているという報告があり、母親の愛着のタイプも子どもとのかわりに影響を与えている。

これらのことから、母親の情緒応答性は、適切に行われることで、母親自身の自信となり、より乳幼児への応答的なかわりを引き出すことができる。一方、母親の状況や子どもの状態、育児ストレス、母親の愛着タイプに情緒応答性は影響され、ストレスによって適切な応答ができない子育てとなる可能性もある。また、このことが更なる育児ストレスへと発展する場合もある。この状況を改善する方法として、タッチケアによるオキシトシンの効果で子どもへの関心を肯定的にでき

ば、悪循環をとどめることができると考える。

まず、応答的なかわりを行うために、乳児の状態を読み取り、より良いタイミングの身体接触を行うために必要なことは何かを考える。重要なことは、子どもが、保護者に働きかけてくるときの保護者の子どもへのふるまいである。より安定した心身のふるまいが必要である。そのためには、人間の心身を活発化させたり、鎮静化させたりすることができるタッチケアが適していると考えられる。また、タッチケアによって、オキシトシンが産生され、その作用で副交感神経系が優位となり、リラックス効果を期待できること、逆に、交感神経系を優位にして、活発な気持ちにさせることができること、さらに、島皮質に働きかけて、親密な感情を持たせることができること等の作用によって、子どもの状態に応じた働きかけができると考えられる。山口(2017)は成人アタッチメントスタイルが安定型に変化したという実験を紹介している。このように、触れる側にもオキシトシンが産生されることを活かして、応答的なかわりを行う際の方法としてタッチが有効であると考えられる。

3. 母子相互作用と母親の状況との関連

岩田ら(2010)は、母親の子どもの行動特徴への不満や育児への自信のなさからくる母親の内面の情緒的葛藤や精神状態などを考慮する必要があることが明らかにした。母親の情緒応答性が子どもの気質と反応に影響を与えていること、また、母親の心理・精神的要因が母子相互作用に影響を与えていることが明確となり、育児支援の方法への提言として考えられていた。飯塚(2013)が明らかにした結果は、母親と子どもの接触を早期に行う必要性であった。そして、出産時の状況は母子関係に影響を与え、妊娠・分娩・出産時の傷ついた体験は、その後の子どもとのかかわりや情緒的応答性に影響を与える可能性が考えられていた。対象の体験した状況について、望まない妊娠を体験した母親といったことに広げることができれば、体験による母子関係への影響の知見が広がると考える。井上ら(2015)は、愛着は母親と子どもの相互作用の積み重ねによって形成されると述べている。その積み重ねには、適切な情緒的な応答が求められる。とすると、生後1週間以内という対象の選択に疑問が残る。また、育児への自信は、子どもの年齢に合わせて、変化するため、1か月時点での測定だけでなく、長期間の調査が必要であると

考える。これらの研究から、母親が情緒応答性を適切に行うようになるためには、育児技術に自信が持て、母親としての役割が明確になることが重要といえる。それは、母親への発達の階段を昇ることである。Bowlby(1988)は「母親と2～3週目の新生児が顔を合わせた時、生き生きとした社会的相互作用の相と無関心の相とが交互に起きる」と述べている。相互作用の起きる相は、「毎回、開始と相互の挨拶で始まり、表情と発声からなる生き生きとしたやりとりまで高まる。」やがて、介入を子どものペースで行え、一方で子どものリズムが母親の介入のタイミングに合うようになるのである(同, 1988)。この積み重ねが母子相互作用においては重要となる。母子相互作用は、母親の抑うつ状態や育児技術に対して自信がないこと、子どもの気質の受け止めなどによって影響を受ける。そのような母親への支援として、抱っこやおむつ替え、授乳などの育児技術への支援を行い母親が自信を持てるようなかわりを持つこと、子どもの気質への受け止めに肯定的なものにしていくよう、かかわることが必要となる。

V 結論

情緒応答性の発達には、情緒の読み取りと母親の応答という積み重ねのなかで、母親の試行錯誤の経験が重要となる。応答的な母子相互作用とは、子どもの働きかけに対して、絶え間ない、子どもの自立性と主体性を育むための母親の情緒的な応答のことであるといえる。母親の情緒応答性は、適切に行われることで、母親自身の自信となり、より乳幼児への応答的なかわりを引き出すことができる。一方、母親の状況や子どもの状態、育児ストレス、母親の愛着タイプに情緒応答性は影響され、ストレスによって適切な応答ができない子育てとなる可能性もある。このように、母親の子どもの内的状態を敏感に読み取り、それに基づいて応答する適切な情緒的応答性が乳幼児期の子どもの発達に影響をもたらすことが明らかになった。適切な情緒的応答性は育児経験によって差があり、乳児との相互交渉の経験から表情のみでなく、さまざまな文脈情報を関連づけて捉えることで母親自身が発達して獲得できるものである。そして、発達に影響を与える応答的な母子相互作用に、子どもが保護者に働きかけてくるときの保護者の子どもへのより安定した心身のふるまいが必

要であることが明確になった。

VI 引用・参考文献

- 阿部和子(編著)(1995):乳児保育—子どもの豊かな育ちを求めて—, 萌文書林
内閣府『平成28年度版少子化社会対策白書』
内閣府『平成19年版国民生活白書』
ベネッセ教育研究所の『幼児の生活報告書』(2016)
<http://berd.benesse.jp/jisedal/resarch/detail.php?id=4949> 2017年5/23
Arnold, J., Sameroff. and Robert, N, Emde. (1980) *Relationship Disurbances in Childhood: a developmental approach edited.* A・J・ザメロフ, R・N・エムデイ (2003):早期関係性障害-乳幼児期の成り立ちと損変遷を探る 監修小此木啓吾訳者代表井上果子, 岩崎学術出版社
Field, T. ,Grizzle, N. ,Scafidi, F., : Message therapy for infants of depressed mothers. Infant Behavior and Development, 19, 109-114, 1996
平田祐子(2011) 幼稚園児を持つ母親の育児トレッサー分析をストレスフルだった出来事の記述回答を用いて『Human Welfare』第3巻第1号 69-77
萩原結花・名取初美・平田良江(2017) 妊娠期における育児準備が育児不安・育児ストレスに与える影響 山梨県立大学看護学部研究ジャーナル 37-44
廣居嘉代子・廣瀬たい子・丸 光恵(2014) 早産児の経口哺乳開始後における母子相互作用の特徴と関連要因—早産児のcueおよび早期産体験の癒しとの関連 小児保健研究 73(5), 653-662
林 裕美, 横山 恭子(2010) ネガティブな被養育経験をもちながら適切な情緒応答性を示す母親の特性について—負の世代間伝達を断ち切るために 上智大学心理学年報 34 33-42
保育所保育指針(平成29年3月31日厚生労働省告示第百十七号)
飯塚有紀(2010) 乳児の「抱っこ」に関する心理学的研究の展望, 人間文化創生科学論叢 第12巻, pp.183-190.
池田隆英(2011):母親による乳幼児への「子育て状況」の要因分析—育児の「ストレス反応」と「子育て姿勢」の影響—, 母子衛生第51巻4号, pp.578-585
井上千晶, 三瓶まり, 比良静代ら(2015) 生後1週間以内と1か月における母から子への愛着(MAI-J)と母子相互作用(AMIS) —第1報:経時的变化と関連、影響因子について—母性衛生・第56巻2号431-464
乾敏郎:脳科学からみる子どもの心の育ち—認知発達のルーツをさぐる— ミネルヴァ書房 第2版 2014
岩田裕美・盛岡由紀子・斎藤由紀子(2010) 出生早期の母子相互作用に影響を及ぼす要因—第2報:母親のうつ状態および子どもの気質(易刺激性)と母子相互作用について— 母性衛生・第51巻2号456-464
飯塚有紀(2013) NICUへの入院を経験した低出生体重児の母親にとっての母子分離と母子再統合という体験 発達心理学研究2013,第24巻,第3号263-272
John Bowlby The Making & Breaking of Affectional Bonds Translated from English by Tsutomu Sakuta , M.D.et al. 1979 ボウルビー 母子関係入門 作田 勉 監訳 星和書店 1981
神谷 美南子(2013) 育児ストレスと母親の情緒応答性 臨床心理学研究(11), 93-107
金城 志麻(2012) 幼児期の子どもを育てる母親の情緒応答性と育児自己効力感との関連 琉球大学教育学部紀要 81, 303-313,
宮原和子, 宮原英種:知的好奇心を育てる応答的保育 ナカニシヤ出版 5-6, 2004
前原邦江・大月恵理子・林 ひろみ他(2007) 乳児を持つ家族への育児支援プログラムの開発—出産後1~3ヵ月の母子を対象とした家族支援プログラムの評価— 千葉看会誌 VOL.13.No.2 10-18
Mahier, M, S. Pine, F. Bergman, A (1975) The Psychological Birth of the Human Infant. M.S.マラー(2001):乳幼児の心理的誕生—母子共生と固体化 精神医学選書
岡藤 円春(2009) 妊婦の内省機能と情緒応答性の関連—インタビューと日本版IFEELPicturesを用いて 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要 15 171—188
岡藤 円春(2008) 妊娠中の女性の情緒応答性の検討:日本版 IFEEL Pictures における応答反応カテゴリ—作成の試み 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要 14 163-179
小原 倫子(2005) 母親の抑うつおよび情緒応答

- 性と育児困難感との関連 小児保健研究 64(4),
570-576
- 小原 倫子 (2005) 母親の情動共感性及び情緒応答
性と育児困難感との関連 発達心理学研究 16(1)
92-102
- 小原 倫子 (2010) 母親の情動共感性及び情緒応
答性と育児困難感との関連 発達心理学研究 16
(1), 27-37
- 小原 倫子 (2006) 母子 (関係における母親の
情動発達研究の展望 Psychology and Human
Development Sciences Vol.53 57-64
- 高橋雅志, 織田正美, 浜畑紀訳, 黎明書房.
- 長屋 佐和子 (2006) 乳幼児表情写真 (IFEEL
Pictuers) を用いた母親の情緒応答性の測定: 子
どもの性差・人数・年齢が与える影響 発達心
理学研究 16(2),156-164
- Uvnäs Moberg K.: LUGN OCH BERÖRING(THE
OXYTOCIN FACTOR), (2000) シヤスティン・
ウヴネス・モベリ (2008): オキシトシン - 私
たちのからだがつくる安らぎの物質, 瀬尾智子,
(訳) 晶文社
- 渡辺弥生・石井睦子 (2005) 母親の育児不安い影
響を及ぼす要因について 法政大学文学部紀要
36-46
- 山口創 (2003): 愛撫・人の心に触れる力 日本放
送出版協会 [刊]

表1 情緒応答性と関連する研究一覧

番号	表題	著者	掲載誌	論文種類 (頁)	掲載年	方法	対象	研究内容
1	育児ストレスと母親の情緒応答性	神谷美南子	臨床心理学研究 (11)	研究 (93-107)	2013	JIFPへの反応	乳幼児を持つ母親	育児ストレスとの関連
2	幼児期の子どもを育てる母親の情緒応答性と育児自己効力感との関連	金城 志麻	琉球大学教育学部紀要 81	研究 (303-313)	2012	日本版IFEELを用いた分析	幼児期の子どもを持つ母親	育児自己効力感との関連
3	ネガティブな被養育経験を持ちながら適切な情緒応答性を示す母親の特性について-負の世代間伝達を断ち切るために	林 裕美 横山 恭子	上智大学心理学年報 34	研究 (33-42)	2010	調査研究 JIFP分析 面接法、 質問紙	1歳以上の幼稚園就園前の第1子を持つ母親	情緒応答性
4	妊婦の内省機能と情緒応答性の関連—インタビューと日本版IFEELPicturesを用いて	岡藤 円春	日本女子大学大学院人間社会研究科紀要 15	学術論文 (171-188)	2009	JIFP分析 内省機能 スケール	第1子妊娠中の母親	内省機能との関連
5	妊娠中の女性の情緒応答性の検討:日本版IFEELPicturesにおける応答反応カテゴリー作成の試み	岡藤 円春	日本女子大学大学院人間社会研究科紀要 14	学術論文 (163-179)	2008	JIFP分析	第1子妊娠中の母親	情緒応答性
6	母親の抑うつおよび情緒応答性と育児困難感との関連	小原 倫子	小児保健研究 64 (4)	研究 (570-576)	2005	日本版IFEELを用いた分析	0~1歳児を持つ母親	育児困難感との関連
7	母親の情動共感性及び情緒応答性と育児困難感との関連	小原 倫子	発達心理学研究 16 (1)	原著 (92-102)	2005	日本版IFEELを用いた分析	0歳と1歳を持つ母親	育児困難感との関連
8	乳幼児表情写真(IFEELPictuers)を用いた母親の情緒応答性の測定:子どもの性差・人数・年齢が与える影響	長屋佐和子	発達心理学研究 16 (2)	原著 (156-164)	2005	IFEEL読み取り	0~24ヶ月児の母親	情緒応答性
9	母子関係における母親の情動認知の発達—生後4ヶ月から12ヶ月までの縦断研究— 小原倫子	小原 倫子	愛知江南短期大学 紀要, 39	学術論文 (27-37)	2010	LIFPを用いた分析	生後4ヶ月~12ヶ月児の母親	情緒応答性

母親と子どもの情緒応答的な関わりについての文献レビュー

番号	表題	著者	掲載誌	論文種類 (頁)	掲載年	方法	対象	研究内容
10	出生早期の母子相互作用に影響を及ぼす要因—第2報：母親のうつ状態および子どもの気質(易刺激性)と母子相互作用について—	岩田 裕美 盛岡由紀子 斎藤由紀子	母性衛生・第51巻2号	原著 (456-464)	2010	質問紙調査とビデオ観察	出産後の母親	母子相互作用
11	NICUへの入院を経験した低出生体重児の母親にとっての母子分離と母子再統合という体験	飯塚 有紀	発達心理学研究2013,第24巻,第3号	原著 (263-272)	2013	半構造化面接	低修正体重児の母親	母子相互作用
12	生後1週間以内と1か月における母から子への愛着(MAI-J)と母子相互作用(AMIS) — 第1報：経時的变化と関連、影響因子について —	井上 千晶 三瓶 まり 比良静代ら	母性衛生・第56巻2号	研究報告 (431-464)	2015	質問紙調査とAMIS調査	生後1週間以内と1ヶ月児の母親	母子相互作用
13	早産児の経口哺乳開始後における母子相互作用の特徴と関連要因—早産児のcueおよび早期産体験の癒しとの関連	廣居嘉代子 廣瀬たい子 丸 光恵	小児保健研究 73 (5)	研究 (653-662)	2014	ビデオ撮影とNCAFS分析	早産児の子どもを持つ母親	母子相互作用特徴と関連要因
14	母子関係における母親の情動発達研究の展望	小原 倫子	Psychology and Human Development Sciences Vol.53	原著 (57-64)	2006	研究レビュー	研究・文献	情緒応答性

